



むらまつひろゆき
村松 浩幸
中野市立中野平中学校

国際Jr.ロボコン in 八戸 レポート

— 中学ロボコン史上初の国際大会が開催 —

第1回

7月27日(日)から8月3日(日)までの1週間、青森県八戸市において中学ロボコン史上初の試みである「国際Jr.ロボコン in 八戸」が開催された。5カ国の中学生が集い、寝食を共にしながら、言葉や文化の壁を越えて協力し合い、ロボットを創り上げた。笑いあり、感動あり、涙ありの1週間で3回に分けて報告。第1回は大会全体の様子を伝える。

はじめに

「ロボコンにより、子どもが大人になり、大人が子どもになった1週間」大会顧問である森政弘先生による、さよならパーティでの名言である。その言葉通り、貴重な体験の中からそれぞれが多くのことを学んで一回り成長できたと実感された大会であった。

この大会は新幹線の開通記念の一環として八戸市が主催した。八戸といえば八戸第三中の下山大(ゆたか)教諭(現・大館中)によるロボコンは全国的に有名で、本誌でも何度か紹介されたが、今回の企画でも下山教諭は競技部長として製作から大会までの指導、プロデュースなど大活躍された。製作から大会までは下山教諭が生み出した八戸三中方式にて行われた。もちろん中学ロボコンとしては史上初の試みであり、壮大な実験であったといえる。

大会の特徴

今回の大会の特徴は以下の2点である。
同じ材料をもとに知恵と工夫で違ったロボットを製作。また得点以外に芸術性、完成度も審査し、創造性を評価。
スタイロフォームとプラスチック段ボールを主材料に機構もデザインも大変ユニークなロボットが目白押し。会場を訪れた多くの子ども達、親子連れ、お年寄り、全国から集まっ

た先生方や観客達を魅了していた。
国別や学校別でなく、抽選による混成チームを編成。1週間共同生活をし、共に作る中で人間性を高める。

スタート時は言葉も交わず、不安の表情。しかし1週間後のさよならパーティ。今時の中学生が国を超え、感謝そして感動の言葉を涙ながらに語る姿に一同感激。この方式の素晴らしさを実感した。彼らは確かに“大人になった”。

以上のように単にロボットを作り、競い合うだけの大会でなく、創造性と人間性に焦点を当てた「教育ロボコンの(エポック)」と呼ぶにふさわしい大会であったといえる¹⁾。

1)「東奥日報」2003.8.29夕刊

タワーボール概要

今回の競技は、高さの違うゴールにボールを入れていく「タワーボール」。各チーム、機能や得点力(勝敗)を重視した“メインロボット”と勝負重視ロボットを補佐し、なおかつパフォーマンスやメカ、からくり、芸術性重視の“サブロボット”の2台を製作することである。勝負だけではない点が特筆である。

コートは赤青に色分けされた16畳のコート(写真01)。

自軍の直径7cmの発泡スチロールボール25個

をタワーの設置部分や受け皿に運び入れる。得点は、床上1点、半球受け皿2点、円筒頂上受け皿5点の3つ。
試合時間は120秒。

その他詳しい内容は公式サイトをぜひご覧頂きたい²⁾。そして12チームを3ブロックに分けた予選リーグと予選順位に従って、決勝トーナメントを行った(写真02)。予選リーグでは森政弘先生(独創性10点)東北大学・中野栄二先生(完成度10点)高橋みのる氏(動き10点)で審査し、ウチワで各審査得点を掲示し、競技得点にプラスされた。

2) 国際Jr.ロボコン公式サイト
<http://www.gijyutu.com/jr-robo/>
記録以外にもさまざまな資料が掲載されている



写真02 熱気あふれる試合会場

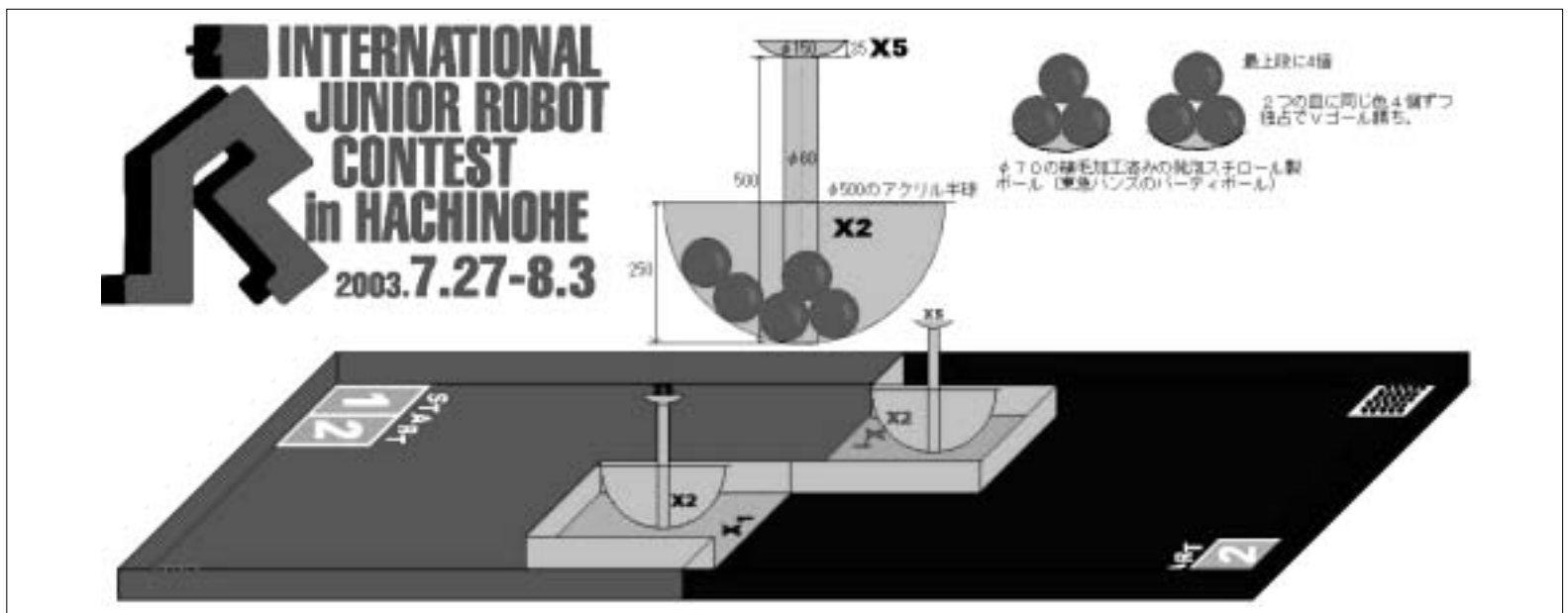


写真01 16畳の「タワーボール」コート